

三声の往復書簡 : ピエール・ルイス, ポール・ヴァ レリー, アンドレ・ジッド

川瀬, 武夫
早稲田大学大学院文学学術院 : 教授

恒川, 邦夫
一橋大学大学院言語社会研究科 : 教授

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1430767>

出版情報 : 現代詩手帖. 48 (10), pp.66-81, 2005-10-01. 思潮社
バージョン :
権利関係 :

三声の往復書簡

ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー、アンドレ・ジイド

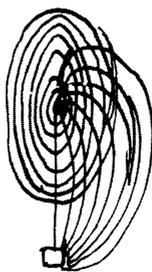
川瀬武夫、恒川邦夫、吉井亮雄訳・解説

〔解題〕

ピエーター・フォーセットとパスカル・メルシエが編纂した『三声の往復書簡1888-1920』（André Gide, Pierre Louÿs, Paul Valéry, *Correspondance à trois voix 1888-1920*, édition établie et annotée par Peter Fawcett et Pascal Mercier, Préface par Pascal Mercier, Gallimard, 2004）から、ピエール・ルイスがポール・ヴァレリー宛に書いた最初の手紙、それに対するヴァレリーの返事（ルイス宛第一書簡）、そして、アンドレ・ジイドがヴァレリーに会いに行った先のモンペリエからルイスに書き送った一八九〇年十二月二十日付けの手紙を訳出した。編纂者の一人で、序文も書いているパスカル・メルシエは、九州大学の外国人教師として日本で三年暮らしたあと、シェフィールド大学の仏文学のレクチャーのポストを得て、英国に移り住んだ、少壮気鋭の学者である。この三声の往復書

簡集は、十九世紀末の「文学青春トリオ」の交流を証立てる資料として、これまで、欠如していたピエール・ルイスの書簡を網羅的に収集・公刊した点だけをとっても、質量ともに、モニユメンタルと形容するにふさわしい仕事である。B5版一六七九頁、収録された手紙一二八五通、さらにアネックスとして、「三声」の関係から逸脱した部分のルイスとジイド二人だけに関わる手紙、あるいは、ルイスが書いて送らなかつた手紙の下書きや古い雑誌記事などが収録されている。

有産階級の子弟であるピエール・ルイス（1870-1925）とアンドレ・ジイド（1869-1951）はパリのエコール・アルザシエンス時代からの親友で、本往復書簡に収録されているルイスからジイド宛の最初の手紙は一八八八年五月七日の日付を持っている。そのルイスと南仏の大都市に住むヴァレリーの出会いは一八九〇年五月二十六日パラヴァス＝レ＝フロで行われたモ



ンペリエ大学創立六百年祭の最後を飾る大午餐会の席上である。たまたま席が隣り合わせになったパリの学生代表ルイスとヴァレリーは、ともに文学に熱中し、詩を書いていることを知り、意気投合する。訳出したルイスの手紙は出合いの三日後、マルセイユから投函されている。そしてパリに戻ったルイスから新しい「将来性ある」友人の話を聞いたジッドは、年末にモンペリエを訪れ、ヴァレリーと会う。ルイス宛のジッドの手紙はその時に書かれたものである。ジッドにはモンペリエ大学の法学部教授をしていた伯父さんがいた。これらの手紙を読むと、やがて流行作家（ルイス）となり、第三共和制を代表する詩人（ヴァレリー）とうたわれ、ノーベル文学賞受賞者（ジッド）となる三人の十代末の肉声が生々しく聞こえてくるであろう。翻訳にあたっては、ジッドはジッドの専門家の吉井が、ルイスはマラルメの専門家で、ルイスにも詳しい川瀬が、ヴァレリーは恒川が担当して、「三声」のトーンの違いが現れるように工夫した。

（恒川邦夫）

ピエール・ルイスからポール・ヴァレリーへ

川瀬武夫訳・解説

一八九〇年五月二十九日（木曜日）深夜

——マルセイユ

わが親しい友よ、今夜はどうしてもあなたに手紙を書かねばなりません。そのためのいかなる口実も持ちあわせておらず、いったい何を書くことになるのやらまったく見当

がつかないにもかかわらず、です。

ぼくはあなたのことを全然知りませんから、あなたについて語ることはできません。そこで仕方なく自分のことを喋ることにします——あるいは、ぼくの個人的嗜好についてですが、よりするに同じことです。ああ、どんなにぼくが困惑しているか分かってもらえたら！ ぼくはいくつかの理論に操られた機械のような存在です。それがぼくの主要な性格であり、同時にまたぼくの大きな欠陥なのです。なぜならば、そのことによって、ぼくは自分の精神の置かれている状態をあたかも永遠の法則のごとく見なすよう慣らされてしまっているからです。これらの理論はぼくの友人たちもよく知っていて、ぼくが彼らに書き送る手紙のなかのどの文章もそれを前提にしていけないものはありません。とはいえ、いちいちここですべてを列挙するわけにはいきません。そんなことをすれば、耐えがたいほど無味乾燥な手紙になるでしょうし、あなたをうんざりさせることで、第一日目からあなたを遠ざけてしまうことになるでしょう……。そこでひとつだけお願いしなければならぬのは、不器用な文章がぼくについての悪印象をあなたに与えるたびごとに、あなたの判断を留保していただきたいということです。ぼくたちがおたがい同じような考え方をする者同士だとぼくは確信していますから。

ぼくの第一の理論とは、ただ〈美〉だけが〈理想〉なのであって、〈善〉と〈真〉はそれが美しいかぎりにおいてのみ追求するに値する、というものです。このような規則

が生み出しかねない道徳上のおぞましい諸帰結を緩和するため、ぼくは自分の生活をふたつに分割しました。すなわち、ぼくの身体だけが関わっているような場合には、ぼくがかつて抱いていた祖国や家族や女性やらに対する愛の感情はそのままに保持します。一方、ひとえにぼくの精神的な能力のみが働いている場合には、「高次の性向」に属さないどんな性向も過ちと見なします。ぼくの考えでは、家族や祖国に対する愛は、人類そのものを越えて、「生命の愛」のなかに凝縮されるべきであって、またそれとても、われわれにはその条理が十分に理解できないという諸法則と諸現象に対する敬虔なる崇拜のうちに解消されていくでしょう。父への愛、王に対する敬意、神の礼讃といったものがぼくには分からなくなっています。ぼくは一個の聖画像破壊主義者であって、そうした人格化のすべては無限を再生産しようとする粗野なイメージにすぎないように思えるのです。女性に対する愛についていうならば、もはやぼくが自分を否認しなくなるやいなや、つまりぼくが自分自身になるやいなや、ぼくはシェリーの「エピソードキディオン」を思い出し、その幾行かを暗唱します。そこでは、理想的な女性を愛さねばならないこと、「おのれの夢想の形象を、生きている、現実のものとして求め、そしてそれを見出せると信じる者たちは過ちを犯している」ということが述べられています。

次にぼくが信じているのは、芸術においては（文学もひとつの芸術です）、疑いもなく〈形式〉が内容に対して優

位を占めるということです。というのも、内容とは（形式、的なものであるイメージの外部にあって）純粹に哲学的な部分にはかならず、科学の領域に属しているからです。つまり、それ自体として存在し、創造されるのではなしに見られるしかないものなのです。これを言い換えるならば、〈理念〉の〈形式〉は各個人にとって固有なものであるのに対し、〈理念〉の意味はある種のダイヤモンド、最初にやって来た労働者がそこになんら自分の刻印を残すことなく発見しうるダイヤモンドということです。具体例をお望みですか？ それなら、ひとつ挙げましょう。ニュートンの晩年の十年間の著作は火事で失われました。アイスキュロスの唯一の草稿はイスマム教徒によって焼かれました。最初の損失はぼくにとつて何ものでもありません。なぜなら、ニュートンのなした全発見は、彼のあとでも、彼なしでも、再びなされたからです（積分学がその証拠です）。しかし、もう一方の損失は絶対に取り返しのできません。それがなぜかはあなたもお分かりでしょう。

以上ぼくが述べてきたことは、次のように要約できるでしょう。人生の目的は美の追求でなければならぬ、美は形式によってわれわれに示される、と。

こうしたすべてはひどく抽象的なことです。全くもって退屈だったと白状してください。しかし、あなたにはそのことを書かねばなりません。なぜならば、私の全理論はこれらふたつことから発しており、今後ぼくがあなたに書くことになるであろう手紙の大体のと

ころを理解してもらうためにも、あなたはそれを知っている
なければならぬのです。

かくなるうへは、音楽こそがぼくにとつての至上の「芸術」である、あなたに申し上げてよろしいでしょうか。和音を組み合わせるほどの素養もないので詩に頼るしかないぼくですが、脚韻以外では、詩のなかでも最も音楽的な要素である「律動」をせめて十分に開拓しようと心がけているのだ、とも。

ぼくの知るかぎりでも非凡な詩句は（ぼくのことをいささかでも分かってくれば、この決まり文句をぼくが少なくとも一五〇行の詩句に対して用いるのを知るのでしょ



△ピエール・ルイス

う)、次の一行です。

Gulf song sail, - at Booz - dormant - l'herbe était noire

《Ruth songait et Booz dormait, l'herbe était noire》
「ルツは夢み、ボアズは眠っていた。草木は黒々としていた」

この律動を前にしては、^{ひびく}脆くしかありません。

それでは音については？ 詩句の響きをどう考えますか？ ミュッセとシェニエのどちらがより白さの感覚に秀でていたか、次の二行をくらべて、あなたの意見を聴かせてください。

La blanche Oloosone à la blanche Camyre

（「白いオローンヌを白いカミールに」）

La blanche Galatée et la blanche Nérée.

（「白いガラテと白いネウル」）

手紙でのおぼつかないモノログでなしに、じかに肉声でぼくの言うことを聴いてもらえていたら、どんなに多くのことをあなたに語っているでしょう！

詩において、ぼくは『静観詩集』と『諸世紀の伝説』、

ならびに晩年の哲学的な詩篇のヴィクトル・ユゴーを神と仰いでいます。ほくにとつてユゴーの唯一の欠点は、彼の取り巻き連中が、彼を理解することもできず彼を愛するにも値しない人々のあいだに作り上げてしまったあの恥ずべき下劣な人気ぶりです。ほくはユゴーのことを、ボードレールよりもはるかに直接的な象徴主義文学の先駆者と考えています。ヴェルレーヌは彼のほとんど盲従的な弟子にすぎません。ただ、ヴェルレーヌ自身はそのことをあまり自覚していませんが。この点については彼と話す機会があったのですが、彼はありつたけのユゴーの悪口を言ったものです。ほくはあなたの考えをそれとは正反対の方向に変えさせたいと望んでいます。

もうひとりの神は、ロンサルです。この詩人についても、ほとんどなんの留保もなしに、それに彼を最初に愛したのはほくですから、なおさらいっそう熱狂的に。サント・ブルーヴは彼をまるで罪を咎められた者のように扱い、そのぬれぎぬを晴らそうとして、かえって彼をはずかしめました。ほくは彼が生きていた時代のライヴァルたちがさう呼んだように、彼を「詩王」として称揚したいのです。あなたはこの詩人のことをよく知らないでしょう。きつと知らないはずだと思います。もしほくを本当に嬉しがらせてくれるつもりがあるなら、日曜日にモンペリエの図書館に行き、ロンサールの古い刊本、できれば一六〇九年の版を借り出して、『恋愛詩集』第二巻の『マリーへの恋愛詩集』を最初の頁から始めて、最後までくまなく読んでみてくだ

さい。いまから予言しておきますが、あなたはそのあとですぐに、『カッサンドルへの恋愛詩集』、『エレレーヌのためのソネット集』、『オード集』、『詩篇集』、そしてとりわけ『エレジー集』、あの賛嘆すべき『エレジー集』を読みたくなっていることでしょう。

さらにフランスの詩人で挙げるなら、ラ・フォンテーヌ、コルネイユ、ボードレール、ヴェルレーヌ、哲学詩のヴィニー、それにシユリ・ブリュドム。この詩人の想像力は世界でも比類のないものです。若い世代では、スチュアート・メリル。

また外国の詩人ならば、ロセッティとシェリー、ゲーテとハイネ、とくに『ファウスト』第二部のゲーテと『天国篇』のダンテ。

散文では、フローベール、ルナン、『説教集』と『演説集』のボシユエ、散文詩と宗教的短篇のマンデス。

芸術では、まず第一にヴェネツィアのティントレット、次にポッティチェリ、あの神々しいブリュドン。現代ならばスナール。

音楽では、異論の余地なくワグナー、これと並んでベートーヴェン。ついでベルリオーズ、シューマン、マスネ（残念ながら、ご婦人方からあまりにちやほやされすぎています）。また、ルヴォフの「賛歌」と「アルセスト」の「宗教的行進曲」には特別な敬愛の念を抱いています。

哲学では、ヘーゲルの形而上学とショーペンハウアーの美学。

以上が、ぼくからあなたに言うことのできるすべてです。自分のことばかりこんな話してしまったことをお詫びすべきでしょうか。ぼくはそう思いません。次にあなたが何を話せばいいか途方に暮れることのないように、こうして自己紹介をしておくのは是非とも必要だったとあなたも理解してくれるでしょう。

あなたの手を強く握ります。

ピエール・ルイ

たぶん月曜日はトゥールーズの学生大会に行きます。もし返事をいただけるのなら、そちらの方に出してください。

モレルも手紙を書くと言っていますが、くれぐれもよろしくとのことですよ。

【訳注】

(1) イギリスのロマン派詩人バリー・ピッシュ・シェリー(1792-1822)の長篇詩「エピサイキディオス」からのかなり自由な要約【編者注による】。

(2) ヴィクトル・ユゴーの『諸世紀の伝説』第一集に収められた「眠れるボアズ」の一行。

(3) アルフレッド・ド・ミュッセの詩「五月の夜」の一行【編者注による】。「オロノヌ」と「カミール」は古代ギリシアの都市名。

(4) アンドレ・シェニエの詩「エビグラム」第十三番の一行【編者注による】。「ガラテ」と「ネウル」はギリシア神話に出てくる女性

名。

(5) 一八九〇年一月、ルイスはアンドレ・ジッドとともにパリのブルセ病院に療養中のポール・ヴェルレーヌのもとを訪問している。

(6) サント・ブーヴの『ジョゼフ・ドロルムの生涯、詩、思想』(一八二九年刊)に収められているソネット「ロンサルに」に対する言及が【編者注による】。

(7) 高踏派の詩人(1839-1907)。第一回ノーベル文学賞受賞者。

(8) ニューヨークに生まれ、パリで活動した象徴派の詩人(1863-1915)。マラルメのへ火曜会)の常連だった。

(9) 高踏派の詩人カチュル・マンドス(1841-1909)は、一八六八年刊の短篇集『愛の物語』の巻末に、自作の散文詩を『紅殻絵』の総題でまとめている。また、「宗教的短篇」とは一八九〇年に刊行された短篇集『告解室』のことか【編者注による】。

(10) ピエール・ポール・プリュドン(1758-1823)、フランスの帝政期に活躍した画家。

(11) アルベール・ベスナール(1849-1934)、ルイスが偏愛した同時代のフランスの画家。

(12) ロシアの作曲家アレクセイ・フェドロヴィチ・ルヴォフ(1798-1870)の作曲した当時のロシア国歌のこと【編者注による】。

(13) グルックのオペラ【編者注による】。

(14) ルイスはこの書簡を本名のLouisで署名している。Louisという変わった綴りは後年のペンネーム。

(15) フランソワ・モレル(1869-1943)、モンペリエ大学創立六百周年記念式典にスイス代表団の一員として参加したローザンヌ大学の学生【編者注による】。

【訳者解説】

「ピエール・ルイスとの友情は、私の人生におけるひとつの重要な巡り合わせだった」とのちに本人が述懐するように、ヴァレリーにとって、ルイスこそは(アンドレ・ジッドとともに)

青春期の最も大切な友人であり、のみならず文学上の一種の「恩人」とでも呼んでいいような存在であった。

ルイスは、南仏の小都市でひっそり詩を書いてきた孤独な文学青年に、首都の才気あふれる若い詩人たちを紹介し、みずからの主宰する豪華版詩誌にその詩作を掲載して中央詩壇への実質的なデビューを果たさせた。また国立図書館でマラルメの入手し難いテクストを筆写してやり、「アイドル」と面会するために上京してきた恥ずかしがり屋の新しい友人をローマ街の「火曜会」のサロンへ連れて行きもした。「私の襟首をつかんで、私を文学の世界に投げ込んだのは彼だ」と、ある友人への手紙のなかでヴァレリーは書いている。「当時、私は十九歳で、詩の商人になるつもりなどまるでなかった……。ピエールが私たちの運命において絶大な役割を果たしたのだ。」

それだけではない。二十年間におよぶ「沈黙期」のあと、ヴァレリーが『若きバルク』によって詩への復帰を果たした際にも、ルイスは決定的ともいえる役回りを果たしても演じてみせることになる。一九一六年六月、数年前から着手されていた『若きバルク』の最初にまとまった草稿の一部を示されたルイスは、詩篇の真価をいちはやく認め、それからはほぼ一年近くにわたって熱っぽい称賛、助言、励ましを惜しみなく旧友に与えつつけることで困難な制作を全面的にバックアップするのである。「この友情の支えがなかったら、おそらく『若きバルク』は完成に到ることができなかつたであろう」とは、このテクストの複雑きわまりない生成の過程を驚くべき繊細さと柔軟さでもって読みぬいた上での清水徹氏の言葉である（『ヴァレリーの肖像』、筑摩書房、二〇〇四年刊）。

そうしたふたりの最初の記念すべき出会いは、一八九〇年五

月二十六日、モンペリエ大学創立六百周年記念式典の最終日のパーティーの折りだった。

八八年十一月に同大学法学部に入學、翌八九年十一月より休學して志願入營していたヴァレリーは休暇をとって、母校の行事に参加した。スイス代表団の学生たちと行動をともししていた軍服姿のこの温和しい青年の姿にふと目を止めたのが、パリ大学からの代表団の一員としてモンペリエを訪れていたルイスだった。そのときの出会いの様子は、しばらくしてルイスが長兄のジョルジュに宛てた手紙のなかで次のように語られている。「そうしてぼくはモンペリエで、この祝賀行事期間のあいだずっとそばにいたのに全く見過ごしていた、ひとりの小柄な学生を偶然発見しました。たまたまその眼に気づいたのです。ジッドのそのように、よく語る眼でした。ポール・ヴァレリーという名前です。彼は『聖アントワヌの誘惑』やユイスマンスやヴェルレーヌについて最も驚嘆すべきことをほくに語りかけながら、手紙を書いてくれと懇願するのです。語るべき相手を誰も見つけられないのをそれほど悲しがっていました。」二言三言、言葉を交わしただけで、ルイスはこの地中海人の早熟な知性に強い印象を受け、ヴァレリーはバリからやって来た若き社交家の優雅な善意に魅了された。

今回訳出したのは、ふたりが初めて出会った三日後にルイスがヴァレリーに書き送った最初の手紙である。七〇年十二月十日生まれのルイスが十九歳、七一年十月三十日生まれヴァレリーがまだ十八歳のときのことである。いかにも青春の特権のようなあけっぴろげの率直さが、ヴァレリーの内気な心を深く動かしたであろうことは想像に難くない。彼が思い切って、自作の二篇のソネットを添えてルイス宛に返信をしたためたのは

それから四日後のことである「次の恒川邦夫氏による翻訳を参照」。こうしてフランス文学史上でもあまり類を見ないような、ふたりの若い詩人のあいだでの熱烈な文学書簡の往復が始まるのである。

ポール・ヴァレリーからヒエール・ルイスへ

恒川邦夫訳

一八九〇年六月二日（月曜日）

我が親愛なる夢想家、

——「モンペリエ」

お手紙にすっかり魅了され、長い間、夢に耽ってしまいました！ あなたもまた、自らの「夢」に難を避け、自らの脳髓に籠って、この世ならぬ国を愛する人なのですね！ どこへでも、この世の外なら！

我々が頭の中で作り出す世界、精神が魔術的に作り出す世界以外には何も無い、すべての線・色・音・香の完璧にして、至高の調和がそこから現出する光輝く「頂天」、それを前にして覚える知的痙攣、眩暈以外のものを、我々は望んではならないのですね？

「形」、神々しくも不可思議な「均衡」、を崇拜しましょう。そして、他の一切の確信については、我々にはふさわしくないものとして、「魂」の白い足にくくりつけられた足枷の鉄の玉のごときものとして、身から遠ざけましょ

う！

私もあなたと同様、「音楽」がすべての芸術を包含し、総合する（ワグナー以来）ものであると考えます。（その証拠には、すべての芸術が音楽に近付こうとし、旧弊な規則、約束事、手法の衣を突き破っています。）

しかし、あなたにとっても、私にとっても、まずは「文学」、「言葉の魔術」です！

私の文学的理想とは何かですって？——はつきり申し上げて、これまでいかなる詩人も私の欲望を百パーセント満足させてくれませんでした。

私が夢見るのは短詩形——ソネットのような——で、そこから生み出される効果を正しく構築できる建築家、明敏なる代数学者、巧緻な計算家と言えるような、繊細な夢想家によって作られる作物です。私が理想とする芸術家は決して靈感に身を翻弄されることを許さないでしょうし、一篇の詩を熱狂の一夜のうちに書きあげることもないでしょう……（私はミュッセが嫌いです！）想像したこと、感じたこと、夢想したことはすべて、節にかけられるでしょう。すべて、重さが測られ、不純なものが除かれ、成「形」され、できるだけ凝縮されて、長さを犠牲にして力を獲得するのです。理想のソネットとは、決定的な雷撃が最後におとずれるように綿密に組み立てられた、一つの完結体です。形容詞はつねに最大の喚起力を持ち、詩句の響きは巧みに計算され、思想は概ね一つの「象徴」に内包されるでしょう。そしてその「象徴」は、ソネットの最終行

「第十四行目」に至って、はじめて姿を明かすのです……

最大限の効果を産するためには、あらゆる手段が講じられてしかるべきでしょう。何世紀も前からすでに忘れさられている多くの手法がそのために動員されなければなりません（頭韻法、反復、etc.）。音楽からも借用される手法があるでしょう……

そんなふうに、私にとって詩とは大団円を準備する以外のなものでもないのです。もし何かに喩えるとしたら、壮麗なる神殿の石段、聖櫃に導く斑岩の十四段の階段に喩えるのが一番いいでしょう。金銀細工、蠟燭、香煙、そうした装飾物の一切は「聖体顯示台」——すなわち最終行——へ注意を引き寄せるための仕掛け、配置なのです……

信仰告白の最後に付け加えておけば、私は大衆には閉ざされた芸術を愛しています。この賑々しい競争と商魂逞しい時代、個性の埋没する時代にあつて、私は「無益なる貴族たち」、繊細なる者たち、「女性的なるもの」の住まう修道院へ身を隠すことを好みます。そして、近代産業社会の野蛮なる偉大さと最期の優雅、最も類稀なる快樂の探求、「言葉の錬金術」が織り成す究極の対比を享受したいのです！……

芸術が次第に狹隘になり、少数の人の特権になることを嘆き、パルナソス山の古い神々に祈願し、憤慨している人たちがいます。私にとって、芸術とは、反対に、エジプトの神のごとく神秘的で、大衆とは無縁なるもので、光輝と純粹さの最高位にそれを保持しようとする少数の正義の人

だけのものなのです！

私の愛読書、それは、「聖アントワーヌの」誘惑」、ボードレール、「さかしま」（我が聖書です）、ヴェルレーヌの詩集のいくつか、輝かしいエレディアの数篇の詩、魔術師マラルメ、ゴンクール兄弟、ゴーチエ、そしてユゴー等々です。（ユゴーを熱愛し、現在は、散文なら『ライン川』、詩なら『諸世紀「の伝説」』と『静観詩集』に熱中しています。あなたと同様、彼は偉大なる退廃派だと思いますが、我が神ではありません。）最期に、私にとって本当に凄い芸術家は、蒼白なるエドガー・ポーです。彼こそ、「直観」と「精緻な美学」の偉大なる精髓です。

私の個別的偏差としては、装飾芸術、建築、聖なる壺や布への愛好でしょう。大いなる関心をもって見てきました。宗教としてのカトリックに関わる事象にも惹かれます。祭儀、象徴、儀式、とくに聖具、そして装飾です。

以上が私です！ *Ecce homo*！

さあ今度はあなたが話す番です！ 文学や芸術に関わるすべての言葉が、天上の言葉のように、何と言ったらよいか、地獄の亡者の渴いた舌に染みわたる冷たい水の一滴のように感じられる哀れなる兵士に憐れみを！
握手。

ポール・ヴァレリー
ユルヴァンV世街三番地
モンペリエ

あなたもきつと詩作をなさるでしょう。今度見せて下さい。その前に、あなたを勇気づける意味で、拙作をいくつか披露します。

夜のために

おお！ 金黄色の香油が塗られ、かぐわしく

匂いたつどんな肉体も、この歌うような

息吹の「夜」とバラの香を運んでくる

微風にまさるほどに甘美だろうか？

どんな女の口づけも、「夜」の接吻ほど軽やかか？

そして「夜」の目―不滅の黄金の目―どんな「女」が

この炎を宿した漆黒の目に対抗できるだろう？

どんな声がこの音楽家の風に太刀打ちできるだろう？

…さようなら！ 僕を待っている君！ 今宵があまりに

心地よいので！ 僕は肉体を離れた愛に身を捧げるよ

この静かな「夕べ」と海辺が僕に授けてくれる愛に。

だって僕は自分の影が長くのびたこの涙を愛し

この「夜」と白い暈かきに包まれたこの「月」と
―夢見がちに「囁く」、悲しい「海」を愛するのだから！…

月の出

闇が広がり、花々が開き、わが「魂」は夢見ていた！
風も眠りこんで、咆哮をやめていた

「夜」の帳が、妙たえなる、―紫衣に身を包んだ
「聖女」のように、恭しく降りていった…

香炉持ちの百合の花々が、香りをふりまき

かほそい首をゆらせていた

星々は、夕べに教会で点される

死者をともらう蠟燭さながらだった

わが心に祈りが潮の満ちるように湧き起こり

青ずんだ深い闇の広大なひろがりの中で

瞑想に沈んだ星々は純潔な目を伏せていた

すると現れたのだ！ 巨大な黄金色の聖体オステチパンが

燦然と―周囲の世界から浮き立つようにして

目に見えない指が、それを天空へ差し上げていた！

ポール・ヴァレリー

【訳注】

(1) 宛名書きは「トゥルーズ学生連盟気付け、文学部学生、パリ代表、ビエール・ルイ【本名】様」および「セーヌ県、パリ、ヴェルヌーズ街49番地」となっている。「編者注による」。

(2) ボーテレルの小散文詩XLVIII番「Anywhere out of the world」を念頭においた表現。ユイスマンスの小説『さかしま』の主人公デ・セサントの書斎の暖炉を飾っている教会聖典範中央部に、他の二篇のボードレルの詩に囲まれて、この詩の写しがあること、また「Anywhere out of the world」は同小説の第一章の末尾に置かれた言葉であることに読者の注意を喚起しておきたい。「編者注による」。

(3) ヴアレリーが「フローベール作」『聖アントワヌの誘惑』と『さかしま』を読んだのは一八八九年九月になってからである。ヴァレリーがヴェルレーヌ、マラルメ、ゴンクール兄弟の存在を知ったのはユイスマンスの小説を通してである。「編者注による」。ヴェルレーヌを知ったのは、もっと早く、詩を書き出した一八八四年（十三歳）の頃とされる。

(4) ジャン・イチエ編纂の二巻本ブレイアード版『ポール・ヴァレリー作品集』の第一巻の年譜の記述によれば、一八四二年に発表されたこの作品をヴァレリーは百回以上読んだらしい。「編者注による」。邦訳のタイトルは「ライン川幻想紀行」となっている。

(5) アメリカの詩人・作家エドガー・アラン・ポー（1809-1849）。仏訳はボードレルが試みている。ポーの「構成の哲学」*Philosophy of Composition*で語られている詩作の方法がヴァレリーの最初の評論「文学の技術について」の土台になっている。この評論は「クリーエ・リーブル」紙の編集長カルル・ボエス宛に、一八八九年十一月十日付けで、送付されている。「編者注による」。

(6) ヴアレリーは大学一年生の年度末に、勉強を中断して、一八八九年十一月十五日に兵役の義務を果たすために、モンペリエのミニーム兵舎の第一二歩兵連隊に入隊した。「編者注による」。

(7) この二篇の詩は、細部の改変を経て、「夜に寄せて」は一八九〇年十月号の「ラ・ルヴェ・アンデパンダン」誌に、「月の出」は一八八九年十月一日付けの「クリーエ・リーブル」紙に掲載された。「編者注による」。

アンドレ・ジッドからビエール・ルイスへ

吉井亮雄訳・解説

一八九〇年十二月二十日（土曜日）
——モンペリエ、カステイヨン通り四番地
「シャルル・ジッド方」

やあ、君

君の筆による戯作の手紙を今朝ペランから受けとったが、これには腹を抱えて笑ってしまった。仮にペランが作法を無視して手紙を開封したならば、「ジュディット・ゴーチエの署名を擬し、当代の著名な詩人や作家、あるいは女優サラ・ベルナルらの名を列挙した」君のおかげで彼は僕にたいして敬意を抱いたことだろう。だがきっと彼は、封筒に記された魅力的な書体を目にしただけで早くも「本当の差出人は君だと分かり」恭しい畏敬の念に満たされていたはずだ。というわけで今朝のことだが、僕は叔父のシャルル・ジッドから手渡しで、宛名書きの上に「校正刷、デリス印刷所」という、まさに冷や汗ものの内容物表示を付した大きな包みと、この印刷所からの手紙、そして



△アンドレ・ジッド

君の手紙をおさめた「ペラン学術出版」の社名入り封筒を受けとった。さっそく叔父は詩を印刷して発表するのかと尋ねてきたが、「いいえ」と答えると、話題はそれ以上は続かなかった。

「エルマン・ディーツ」先生の勧めにしたがい、活字に組まれた自分の本をせっせと書き写しているが、ページを繰るごとに誤植や綴り字のまちがいが見つかる。そして、雑誌「両世界評論」誌への掲載というこんな企てなぞ無意味なのだという思いがますます強くなっていく。

それでも続けている。四十ページまで来たところだが、最後までやり抜こうと決めているんだ。恐れていたよりも

ずっと量があり、指が痺れてしまつて字が上手く書けない。僕にとつては唯一これが、空しいだけに辛い、またそれだけに報われてしかるべき、意志力を試す仕事になつてしまった。「かまうものか！ やり通すぞ！」

当地で我が学士課程最初の講義に出席したが、少々特別な講義だった。

もうひとつ別の講義にはヴァレリーと一緒に出たが、こちらは初っ端からうんざりするような代物。それならばと、二人して月下の漫ろ歩きを決めこんだ次第だが、このときの散策は先々まで最も不思議な思い出のひとつとして記憶に残ることだろう。

僕たちはたえず君のことを、愛情をこめ畏怖心をもって話している。君の存在は、いわば現代版バルナソス山の立法者として、神秘的教義のうちに聖別化され、遠く彼方から威光を放っている。そして僕たちはとはいえば、みずから「芸術」の聖なる戒律に背くとき、わずかにその「君が定め司る」教義の峻烈な一端を、修辭をこらした叱責というかたちで垣間見るにすぎないのだ。

ヴァレリーについては手紙に書くよりも直接君に会って話そう。初めの印象はかんばしくなかったが、今となっては君が彼と引き合わせてくれたことをただただ心から感謝するばかりだ。だがそれでもやはり手紙に書くよりは直接会って話すことにしたい。

今や僕はマラルメにたいし、ほとんど信仰にも近い、これ以上はないほど大きな賛嘆の念を抱いている。そして毎

朝毎晩、震えんばかりの敬虔な悦びを感じながら、彼の詩の何篇かを読み、その深奥を探っている。

君からたくさん長い手紙が届くのを待っている、不真面目なやつじゃない手紙だ。待っているよ、分かっているね、君の手紙が欲しいんだ。長いのをくれたまえ。

ドルーアンに近々会うようだったら、僕が何度か急かしたにもかかわらず、ちっとも便りが無いのに驚いていると伝えてくれたまえ。

愛情をこめて君の手を握る。

アンドレ・ジッド

〔訳注〕

原著では書簡の四カ所に短い注が付されているが、これらについては編者の了解を得たうえで以下の訳注4〜6に溶かしこむかたちをとった。

(1) シャルル・ジッド (1897-1993) はアンドレ・ジッドの父方の叔父で、当時はモンペリエ大学法学部教授(後にパリ大学法学部に比較社会経済学講座の正教授として招聘される)。ジッドは母に連れられて幼少時よりたびたびこの叔父の家を訪れていた。今回のモンペリエ滞りはルイスの仲介によりヴァレリーの知遇をえることを主な目的としたもので、ジッドは叔父宅の近くの粗末なホテルに部屋をとり、十二月十三日(ないし十四日)から二週間ほど当地に逗留した。

(2) ルイスからの書簡(十二月十七日付)は全編がこの詩人特有のおふざけによるもので、差出人にはテオフィル・ゴーチエの長女ジュディットを騙り、名宛人には「ペラン出版社社氣付、ベルナル・デュルヴァル様」と記す。手紙の内容容じたいも真偽のほどは大

いに疑わしい。言うまでもなく、ジッドの処女作『アンドレ・ワルテルの手記』の自費出版を請け負ったパリの版元が旅行中の著者へ転送することを見越したうえでの戯作である。ちなみに「ベルナル・デュルヴァル」は、当時ジッドが親しい友人たちとの文通でもちいた偽名のひとつ。実際の印刷公表テキストに著者名として冠された例はないが、二カ月ほど前に従姉マドレーヌ・ロンドーがジッドに宛てた書簡の文面から推すかぎり、この偽名が「アンドレ・ワルテル」に先立つ一時期、「手記」の主人公の名であった可能性も皆無ではない。

(3) ジッドが受けとった校正刷は、『アンドレ・ワルテルの手記』の二種の刊本のうち、当初の予定とはことなり先に出版した結果的に初版の地位をえた「普及版」の再校、あるいは蓋然性は低いがその第三校。おそらくは点検・照合のために自筆修正入りの先行校正刷も同封されていたと思われる。この新たな校正刷は、年末にマドレーヌへの献呈用を含む数部の暫定刷私家本が出来しただけでジッドの手元におかれ、ペランに戻されたのは翌年の一月半ば以降のこと。その後、市販本は二月末にようやく完成・発売の運びとなるが、依然として誤植が数多く残っていたため、ラール・アンデパンダン書店から「豪華版」刊行の準備が整うや、ジッドの命により直ちに廃棄処分されることになる(実質的にこの措置を免れたのは、すでにプレスサービスに使われていた約七十部のみ)。

(4) エルマン・ディーツ (1891-1920) は、文学およびドイツ語の教授資格者としてアルザス学院でジッドとルイスを教え、とりわけ前者の文学的な成長に大きな影響を与えた人物。二人の若者が言葉を交わすようになるのも、ある日この教師が、フランス語作文で常に首席だったルイスをおさえ「一番、ジッド!」と高らかに宣したことがきっかけである(回想録「一粒の麦もし死なずば」が語る有名な挿話)。一八八八年にビューフォン高等学校へ転任して後もジッドの良きアドバイザーを務めていたが、書簡が語るように、教える子の処女作を「両世界評論」誌に発表するよう勧めたのもその願れ。

ジッドは刊本の校正刷をもとに自作の筆写を続け、パリ帰着後の翌年一月十九日にこの作業を完了する。ただし、具体的な経緯は不詳だが、計画そのものは実現に至ることなく終わった。

(5) ジッドがモンペリエ大学の講義を聴講したのは、おそらくは叔父シャルルの仲介による。なおジッドは、翌年の一月半ばにソルボンヌに学籍登録している。

(6) モンペリエ到着後、ジッドがヴァレリーと初めて対面したのは十二月十六日以降のことと推測される。以後二人は十日ほどのあいだに幾度か会い、文学を話題に尽きることなく語りあった。なかでも書簡が言及する植物園やル・ペイルー遊歩場での散策は両者の心にとりわけ強い印象を残す出来事となった。ヴァレリーは散策から日をおかず、十四行詩「友愛の森」をジッドに献じて新たな友情の誕生を祝う——「私たちは純粋なことを考えた／寄り添うて道すがら。／私たちは手に手をとった／ものも言わず、おぐらき花々のなかで」(この詩は一年後、若干の手直しを施されてルイス主宰の文芸誌「ラ・コンク」の終刊号に発表される)。いっぽうジッドのほうも七年後『地の糧』(第三之書)のなかに、この折りの記憶を書き記すことになる——「モンペリエの植物園。私は思い出す。ある夕べ、アンプローズ「ヴァレリー」と一緒に、まるでアカデミアの園にでもあるかのように、糸杉にぐるりと囲まれた古い墓に腰をおろしたことを。薔薇の花びらを噛みしめながら、私たちはゆるやかに語りあった」。

(7) マルセル・ドルーアン(1871-1943)。ジャンソン・ド・サイイ高等中学校の哲学級でルイスと知り合い、彼を通じてこの一八九〇年にジッドと交友関係を結んだ。さらに九七年にはマドレーヌの妹ジャンヌ・ロンドーとの婚姻によって後者の義弟となる。ミシェル・アルノーの筆名で「ラ・コンク」「ラ・ルヴェ・ブランジュ」などの文芸誌に詩や評論を発表。また一九〇八年から翌年にかけては、ジッドやジャン・シュランベルジュ、アンリ・ゲオンらと共同で「新フランス評論」誌を創刊する。

〔補記〕

今回訳出した書簡は、ジッドがルイスの仲立ちにより初めてヴァレリーを知った一八九〇年十二月のモンペリエ滞在中に書かれたものである。「両者の顕著な相違にもかかわらず、「爾来」五十年以上にわたる、衰退も対立も亀裂もない友情」(ジッド「ポール・ヴァレリーの光輝」、一九四五年)が始まった記念すべきこの年の瀬は、またジッドにとっては処女作の出版を間近にひかえた重要な時期でもあって、当然のことながら書簡では、新たな友情の誕生とならば、文学的出立へ向けた準備が話題の中心を占めている。この点については理解を助けるため右に若干の注を付したが、ルイスの関与や同者との以後の関係に触れつつ、さらに以下を補記する。

『アンドレ・ワルテルの手記』(当初の題名は作中作品と同じく『アラン』)は、ジッドが「長い愛の宣言、愛の告白」と考えていたもので、彼のなかでは従姉マドレーヌへの愛と同一視されていた。同書を献ずることで彼女から結婚への同意をかちえ、少年期以来の長い春に終止符を打つ、それこそが処女作執筆の最大の目的だったのである(実際にはこの目論見は、年明け早々マドレーヌの拒否によって脆くも崩れ、婚約・結婚までにはさらに五年近い歳月を要するのだが)。しかし同時にジッドは、ゲーテに強く影響された自著が新たな「若きウェルテルの悩み」として多くの青年たちの共感をうると固く信じていた。現実には売れる見込みのない自費出版だったにもかかわらず、彼が普及版と豪華版という二種の刊本をそれぞれ別の出版社(ペラン学術出版、ラール・アンデパンダン書店)から上梓しようとしたのは——くわえて結果的には実を結ばなかったものの、全文の雑誌掲載まで企てたのは——、そのような熱い思

い込みによるところが大きい。

ジッドは『手記』の計画を早くからルイスに打ち明けていた。ルイスも作品生成の伴走者として、著者にたいし激励と助言を惜しまなかった。だが一八九〇年の春に始まったルイスとヴァレリーの交友が深まりを増すにつれて、男女の三角関係にも似た感情の纏れから二人のあいだには微妙な影が射しはじめた。同年七月半ば、ルイスはヴァレリーとの関係をめぐってこれ以上の齟齬をきたさないために、九月十五日まで手紙のやりとりを停止して、お互いの作品の執筆に専念しようと申し出る。ジッドとしてもこれに同意するはかばかかった（訳出したルイス宛書簡において、ジッドがヴァレリーとの出会いの委細を直ぐには筆にのせようとしないのも、この一件の反映と見てよいだろう）。

『手記』の原稿が完成したのはまさに九月半ばのこと。だが「協定による沈黙」ののち、ようやくジッドから知らせを受けたルイスの返答を飾るのは、けっして素直な喜びばかりではない——「ああ、友よ、友よ！ 今度こそ本当にうれしい。『アラシ』が完成して、僕はまるで自分が書いたもののようにほっとしている。でも僕にそれを隠しておくとは、なんと君は残酷なんだ。[...] 君がとても俗っぽい散文を書くことは事実だ。君は魂の糧をつくる。はっはっ！ では〈芸術〉のほうは？ どこかで君はそんなものはどうでもいいと思っている」。皮肉と留保をふくむ後段の記述からも、作品の基調をなすロマン派的神秘主義がルイスの高踏派的な理想と一致するものだったとは考えにくい、それでも互いの処女作に一頁の空白を残しておき、これを相手に埋めてもらうという以前からの約束を尊重したルイスは、作品を二十歳で死んだ若き詩人の告白として公表

することを提案し、みずからP・C（ピエール・クリシス）の変名で死者略伝の執筆をひきうけるのである（ただしジッド自身による草稿も存在。またこの死者略伝は豪華版には付されなかった）。

以後暫くのあいだ、二人の関係は親しさと相互信頼を失わず、好ましい影響を与えあうものであった。どちらかと言えば人見知りするタイプのジッドが、マラルメやエレディアアをはじめバリ文壇での人脈を急速に拡大していくにあたって、何事においても積極的で物怖じしないルイスの後押しが大きく貢献したことは疑えない（これは後者を介してマラルメの知遇をえたヴァレリーの場合も然り）。また、たとえば一八九一年の秋にはヴァレリーを交えた三者間で詩の共作を図るなど、互いに文学的交流を活発におこない、それによって多少の齟齬はのりこえ友情の維持をはかろうと努めていたのである。

にもかかわらず二人のあいだには少しずつ、しつくりと行かないところが増えてくる。ルイスの諧謔と悪戯心は、親密さの表現であるうちはよいが、ジッドにとつては次第に神経を逆撫でする重荷へと転じていくのである。そのさい、ヴァレリーの存在は軌轢の緩衝役を務めたというよりは、むしろ逆に「ルイスか、あるいはヴァレリーか」という二者択一の対象として事態の悪化に拍車をかけた感がつよい。「愛憎ふたつながら」、まさにこの意味でジッドのルイス観はどこまでも両義的なものだったのである。

友情の終焉——。九五年五月末にジッドは母を喪う。ルイスはただちに悔やみの手紙を送ったが、これにたいしジッドは六月三日付の返信で八年ごしの友情に実質的な終止符を打つ。その長い手紙の冒頭と末尾——「いや、ピエール、もはや取り返

しのつかない過去に立ち戻るのはよそう。もう僕に会おうとはしないように。人生の途中で僕たちがまた出会うときには、そしてそれは頻繁にあることだろうが——なぜなら僕たちは二人とも高貴なことを心から愛しているのだから——、僕たちがまた出会うときには、君が手を差しのべるならば、僕は君の手を握るだろうし、こちらから手を差しのべもするだろう——なぜなら僕たちが互いに理解しあえないことを人目にさらすのは無用で遺憾なことだから——、だがしかし僕たちの友情についてはもう口にしたくないように。「……」母の埋葬が明日火曜日の正午におこなわれるが、そこにはけっして来てくれぬよう、君の繊細な気持ちと尊厳とを当てにしている。さらば。冷たく君の手を握る。アンドレ・ジッド／この二通の手紙について僕は誰にも語るまい。」

周知のように、この一年後、創刊号の掲載内容をめぐりルイスら数名の同人と対立したジッドが「ル・サントール」誌を一時脱退するという件をきっかけに、二人の決裂は少なからぬ同時代人の知るところとなる。だが、ひとつの喪に刻印され、痛ましくも冷ややかな絶縁通告がそれに先立ち密かに発せられていたことを思えば、この公的な決着はむしろ遅すぎるほどであった。

後年ジッドはルイスとの思い出を、とりわけ彼への感謝の念を、折りにふれて文章に綴っている。これにたいしルイスのほうは後々まで固く口を閉ざし、輝かしく始まり騒々しい曲折をへて苦く終わったこの友情について、ほとんどなにも語るこゝろがなかった。